普陀洛傳記　九

千厓文庫
文庫24
A594
9

善悪法伝記巻之弐

播磨国教信沙弥の事

勝尾寺七代目に勝如上人と申せし僧ありて此上人の往生の修行を浦山敷思ひて法無言に入籠居を今清浄にして四年の間念佛して外に事無し勝如上人ハ我此一代の一切経を繰返し成仏得脱ハ兎角人の

文庫24
A594
9

夫我朝の凡人を済し阿含方等般若と云縁法華天地開闢と同時に成仏を乃る為の書にしされとも釈尊の出世に応し玉ふて三十二年の間無尽の法を説玉ひし中にも弟子の流尽通り法の時ハ所々に音信て閉へ入ぬ凡開会ハ妙なる事の天童かましきに輪を回し玉ふ事のなれハ一の弟子流通経と云より付属十二年の月寂帰依根縁勤め玉ひし二月十五日夜頼りに唐の方をほとくしと抄さたる和讃あらんと云し我らを救せん為輪をあらし玉ふに何に証もあり方ハ末年八月十五夜に往生するの時を知らせましとて家ハ播州加古の教信の菩経と云ふあり只念仏極楽を忘へ余念なきともそれハ難行苦行し六人を屍ハ人受けも及す業雲明西方に翔さる極楽へ往生経と云縁の往生せしあらんと我しか其の月寂中に二ヶ所り遠に音楽聞ゆ

一期ちに名号を呼（よぶ）びし身に来年の往生を告（つげ）

知らす程の善知識なれし急（いそ）ぎ極楽へ人をも

尚善知識の勧めは事と極楽を唱

是（これ）も念仏して勧め往生を行ひ候へし也

息の弥陀名号を称申すにて往生するもの

観経に向ひ奉り極楽の如来の尊影へ行て至るに

とても此観経往生を行ひ見る所は

肩（よひ）に海の如き加様の善知識にて往生

すなはち念仏三昧に入りて往生せしも来年八

月十五日の夜也と知らせし程の知識（ちしき）いふ所の

勧めなれは是をも念仏の善知識の如（ごと）くに

勧めしとなれは観経に往生要集（わうしやうえうしふ）相して極楽（ごくらく）へ行

ちぎり成仏にて来迎の尊（たふと）きは是非もなき御事のいと

哀（あはれ）なる法（ちゝ）の里（さと）へしらせ給ひける所のおそと聞

て後の世夫（おつと）は往生なし（し）て後に残りし妻娘（むすめ）

別（わか）れは無我（がび）なれとも歎きを（うい）を肝（きも）に銘ずる所の

るすまゐらせ候困窮(こんきう)なる歎(なげ)きいたし候と云様子不便(ふびん)に
存まゐらせ候旅(たび)の用意にもなれかしと銀子遣しまゐらせ候行(ゆく)
衛まゐらせ候へし先を問(とひ)ゐらし出で候へし亡者(もうじや)は何処(いづこ)より
来りしと云へは向ふの者のこりあると云へ其れはみな杖
こゝ十徳(じつとく)を着(き)たる坊主西に向ひ出家して行
居り候へ出家たる者は是候相見は結構(けつこう)
成仏世にも訪ひ候へし
姿は礼拝している人を...字

も知らぬ人まで年月のうち働(はたらき)に罷(まかり)出で
世を渡りし人々名をよはれ人々名を呼ならし何の
坊主(ぼうず)〳〵と呼れ候へは何方にても気兼
住けると段々実名も出家としても
少しも大に驚きこれは誠女房の何なりと驚きまして
出家にまた出家と云人を国に参りて
法師の坊の社を出家の
こいた...の...をかし...と申

まで夜毎にしこゝろ[illegible]父(とゝ)さまに御母と旅(たび)の身空の
[illegible]をおもし[illegible]にて忠義[illegible]主[illegible]孝行へ年する
ハ[illegible]同[illegible]親[illegible]礼[illegible]
し十徳(とく)の行儀(ぎやうぎ)を師の坊への土産(みやげ)として[illegible]
りて[illegible]の方出家[illegible]彌(いや)[illegible]伏[illegible]知れ
願かけし精進潔斎(しやうじんけつさい)しものまゝ百[illegible]知れ
只念仏の[illegible]せし[illegible]つくし[illegible]西に向ひて居
孝行し日数経[illegible]念仏乱(ごく)れぬ形もを[illegible]鶯(とびうくす)

も[illegible]精[illegible]慈悲(じゞ)押[illegible]れハ利十徳(とく)
礼(れい)を尽して[illegible]六字も知らぬ[illegible]念仏
[illegible]念仏往生する[illegible]親と[illegible]
[illegible]なまじ[illegible]経を知りくる[illegible](めくら)[illegible]成
[illegible]釈観経[illegible]を済(すま)[illegible]自(おのづ)と念仏して成仏[illegible]
親と十二年の[illegible]の[illegible]年月を念仏
[illegible]十二年の[illegible]勤めし
[illegible]一字も知らぬかたの孝行[illegible]備(すゞ)[illegible]として

一向専念佛といふことを唱へまいらせける

浄蓮斎

念々と罪ハ法の種となりて

佛となるの身こそ安けれ

念々ともハ我身ハ三毒煩悩の罪念々と起

罪の念々よりも修懺悔の法の力にて煩悩

の中に振を生せるハ法の助けなれハ法の種となる罪

の念なき法の力念々備と云仏にならハ法の

又之讃ハ佛を称し奉りし事する表ハ職位称し

阿　此世にて悪魔の災難を除き七難即滅

七福即生とあれハ何事も思ふ事恐しきものの幸

あさき安き身ハとこ云仏にして此ちまゝ浄薬師といふ

薬師如来ハまた名ハ海東方浄瑠璃の

世七宝の月浄土の衆徒勧名利二階

衆生を救ひ二世法の人讃法海の

此山にて開山伝教大師即身成仏の理

如く人法様あるは佛成を遂(とげ)まする法也とて序の二
諸宗の処に諸宗を立(たて)四筆の月法花ら如く
法花経の一切経を成ずる網の目のごとく法華経
業の戸にひらかれかり回向を
ひつ業の(せきき)衆にかんまかせん
此れに同意をさまたげ法華造能業意と
いつの時もよしの念仏の行し法をもて
法華子母張院(がごいん)の(せいらく)法常を取れて法経(ちやうほう)

まづ唐土(もろこし)の善導(ぜんどう)大師法然上人と法照禅
法蔵経のまし法蔵の六字を顕(あら)はし玉ふ六字は
一経称分法蔵経の(わうひ)業の法紋(もん)付つ罪悟し称すれ
ハ業由意して法由を念仏に法報なりと称すれを
せ玉ふ上人是康教人法海のまして顕すて二階級
の法華ぞと云ふる宗に法事なり罪山法然上人法
唐宗の顕法性(せいせき)顕と云ふは成二階書之云ふ行物(ち)
恩徳又出相来る称(まと)法因顕と宗如し己五法宗子

中将姫の御ぐしにて縫給ひし宝物あまたありとかや 中将姫ハ
まえ人仏なされし紫雲曼陀羅の霊宝なれバ当山にて
ハ仏たちと宝物なり 唯念仏の霊場なれバ
仏ゆゑ天竺仏師ありと伝へられたる上人建磨
二年山宵より法隆寺
鴻巣より山之海宝皇子の往福石の事
大和の地方の松雲山の中にある寺より

第廿四番 摂津国中山寺 観世音
聖徳太子の御作 太子御建立なり
日本観音霊場の始の所の蔵ハ当寺ゟ
尊く信ある札所なり

摂津国中山寺奥の院ハ大日堂の後ろ奥
の院ハ背太子の御建立の中山観世音堂と云ふ
当寺十八丁ゟ大長那と申ハ人王十四代仲哀天

皇の后にして此天皇ハ八幡大菩薩の御父にして八幡大菩薩

ハ応神天皇にて御母ハ神功皇后にして大菩薩ハ

仲哀天皇の后にして神功皇后ハ御后にし

用明天皇の太子聖徳太子斑鳩御宮の南殿にて御誕生

募ふ天人の天人（しやうかんたう）を召連天下りましまし太子ハ

いろいろ天女あまた来ませしと御作ある天人の如く称

清風擁護の如き観音の降たまふ霊場也

されバ神のさまんハ仏法の最初霊場

を積分と幾たびか知る者もなく老人来る

ぬ末世の衆生を済度の観音菩薩にて一度参詣すれバ

悲しいかな悪道に落ると免れ地獄に落ず極楽に生る

埋れたるの数ありしを今ハ仏法興隆なり

さても悦び楽ハ尽し知れずして此ゆへに千手観音

とぞ申す観音の霊地と成ハ末世衆縁の霊場

なりし是より続く所ハ大菩薩とのたまひて

法華堂のゆゑなり太子ハ勝鬘経を講じて説給ふ

其の遺跡をとゞめて今の中山の麓に金龍寺と云
寺あり昔此法出来て山上に法縁ありて紫雲棚
引かゝる山なれば昔ぞ霊地なりと自ら結ひて山上の
京極法讃ありて寺に安置ありて三尊の秘仏を表し
たる山にして三尊の中の峯にて法華をなさしめて
其由は武庫川の流れは山の麓を廻り海に大悲の義
へのかく来世有縁の三土を廻して天竺まで新たる法
理をあらはし耆闍崛山に武庫川の流は新たる法
に満まし播磨州と云へくして西ハ播磨と成る事
法一代の因の悦なれ山の尾つゞき岩の上は法をきく
与へて衆生の法縁ありし生死の高き足跡なり上
其の駒の多く蹄の跡岩の上にありてたえん
此寺の聖蹟が又一所あり又上りし所なり本尊に成る
に移して富士権現を祭る加様なる寺にて一日に千度
も駈りてし来たり本尊は十一面観音也
有まりし仏殿を法建立ありて当院光の時

大師手づから書れし中山の境内より見ゆる駿馬（しゆんめ）膝（ひざ）を
折取（をりとら）せらるゝされば今此の所に一本の角（つの）生（はへ）し
此の角蘇民将来と書付し膝（ひざ）を折取を
かゝれし角を折とられしとて高こ山と云（いゝ）岩よ
叢雲鬣（たてがみ）きたる所に紫雲立山と云し所の角の
霊宝として書梅山の寺ニ今にあるのみならず處々中の
寺を中興として中の寺ニ観音菩薩を安置して祭りしかば於
中山寺といふ　是自観音霊場の始なれば

諸国ハ西国三十三所の札所と成られし大悲水（ひすい）と云所
あり是観音大悲の示現なれハとて號（がう）ハ云しける所の足
の足を洗川を別足洗川と云ふ時中山寺寺ニ
帰りハ花山院（くわさんのゐん）入道法皇の熊野（くまの）三所権現（ごんげん）の御告
によりて託（たく）せらるゝ西国三十三所順礼を河内国石川郡
佛眼（ぶつげん）僧正（そうじやう）津の国中山寺に至り物見る山
一番と成られし時より一番（上麓）より成寺坂寂す
中山寺ハ観音の霊場なれハ古（いにしへ）ハ一番と定め

しも長谷（はせ）の徳道（とくどう）上人閻魔（えんま）大王に授（さづか）りまし宝（ほう）

印を冥土より帰（かへ）りて運（はこび）し其ハ摂州の藤（ふぢ）に隨（したが）ひ

すまじと閻魔（えんま）王の證（しよう）文と共に中山寺に納めおかれ

石の庵（うと）に入置年經て其の山の方に夫れ

岩戸のごとくにして一千有（おく）余年に石の庵にまして光を

納めおかる

中山寺ハ本尊十一面観音龍（りう）蓮（げ）に乗（のり）玉ふ左の脇（わき）

立十一面観音像（ぞう）にあまり左の脇立観音に（?）

野狩形の法名にて運慶（うんけい）湛慶（たんけい）の両作也

古（いにし）へ中山の観音へ上りし賽銭をわらずして山崎々

中山へ向て出家せんとて一心に山崎に進まざるまで

九人の悪人共盗（ぬす）みし時それ賽銭を奪（うば）ひ取り

命を救（すく）ひにしそ實（つきまる）九人の盗人ハ東の方へ

向ひとて向ひ合出て行く石坂寺石べにしと折拔

ふれ一向ハこの者ハ行迷ひ西の方へ行きて又西の方へ

折けるぞ南かゝる四方へ隔に折其（かけ）に迷（まよ）ひて取る

おれ顔をつぶされても今(いま)は一足も近よれば凡人の迷(まよ)ひ

多羅(まら)菩提加の菩提(はうが)を求め極楽浄土の浄瑠(るり)の為

へし清浄(じやう)に云ても名すてし云ふ名を小(ちいさ)く成ておし

止(やむ)事と思ふところのぬしと修羅(しゆら)の身を我にかし来(きた)

所と云は悪く取て清浄を移すと云ふ西方は忘

も一念称(とな)ふれば悪く云る菩提(ひとく)の道(ひとつ)

者の浄利となと難(なんぎ)を又(ゆゑ)修羅道(あくのごとく)の段

りつる所は菩文も難きものと多(た)念を申さん大

若天魔の觀音と唱(とな)へしれは忽ち小石も止(やま)ぬ

ならば凡人のきんしんを破め月の光り浄瑠をさしまる程

の所を死しての様の責(せめ)をしらんも半ら難し

今は観音を頼(たの)み多仏の此悪業を(かるば)すれは

さんと凡人乃ら念誦て煩悩を切中山へ出家

と識しる此仲間よ山寺の庭為て此身を吹

様は凡人のもんは目の見し様のもんよ非(ひ)は菩哉(これしき)

の有り何ぞ思ひしるのほし何(あにと)てん勢(かた)り坊主(ほうず)は

蔵くらて一家ハ安楽(さうらく)におしも何不足せずとて悪党(あくとう)

まゝ御(まさ)しく孫子の煩(ぼだい)ハ知らざる観(わん)念[illegible]若云

末の世に至り黄金をつかみ取り[illegible]口ハ毎日色

ひろがる目ハ地きさ[illegible]蓮(む)を[illegible]報(くわほう)[illegible]て

若しも繼(てい)きあらハ鬼のあくく人も是にて例へある

是故しまが孫ハ死(ふり)しる[illegible]の[illegible]山の

鐘[illegible]根(こ)に九人ハ助け[illegible]子孫ハ若云

[illegible]是るとぞ一[illegible]のもと成て無[illegible]く

山寺が中山之坂是山寺の前に云ふもて頭(く)

[illegible]世の[illegible]あまり[illegible]ハ何[illegible]人[illegible]

[illegible]とぞ[illegible]山寺が国(わう)[illegible]

[illegible]ハ[illegible]人(くわんと)[illegible]と云ハ中山寺の観音を

[illegible]信(こ)[illegible](ごい)[illegible]と

[illegible]ハ[illegible](こう)[illegible](ちけ)[illegible]ハ[illegible]何年

[illegible]ハ[illegible]中山の[illegible]花ハ

[illegible]花ハおり[illegible]の[illegible]ハ

御ハ君母に年寄へしたれバ出世も一統より出生す
て出て銀杏へ来りれども嬢蔵ハ浮びつゝ其は
年経ちされバ嬢蔵の錠（かぎ）の孫を出て蔵より出て
ぐハ自ら出て打んとしよりハ如山の孫は扇の先き
足雛をくるりと延して中に隠しこれを人は見
人と驚き隠ぎ周章する内出して年経る錠
銀杏へ尾鑑りたるは中能手りて出蔵ゑへ
ハ生銀杏も出で四年あくこ年ならず鬮の年

従て家御に難きを是も浮かりしは何の出せる
の通り之来りしては扇を銀杏は浮経何れて
扇は浮年経居しに中山銀杏七月十日殺年
と云て毎年迎に出る雛早の年経るに此日は六年
之の銀杏に中山へは有る中山の銀杏は金
鍵（かぎ）を拾ひ出して此鍵（かぎ）を両方へ投せしが思く
銀杏樹をへは出来し是を年に大樹年経の中よ
二つ入りて種年よりあらはれて所の通りあるる

昔ハ日念仏しくちやんまゐハ何事も無く仕の序
長谷の観音様え又清水の観音様へもと云
参りなとゝ門しく我も[illegible]て我身立て大[illegible]の通度
の[illegible]我も彼もみなも[illegible]居を見世観世音
廿日まし是か[illegible]にも我もなもにて千日ナリ
向ふとも昔（むかし）か念仏す我らふ湖（うみ）上に左遊（さえん）と云
仏（じねんしや）しんばらを是を合点（がてん）せバ何を紀（むろ）されるなど
ひど修んを嫉（さまたげ）らぬ又念（こんゆう）軍も[illegible]と云

ちからを加ふ左縁（さえん）ハ何居（がてん）を懸けべしと云ひ題軍（まくげん）の
千日念仏するもありてそれ/\とて居けんと女
房に云ふハ（じ）独ふこゝろも念仏念さんと云然よ
慈に心を致して念仏ふ行に根子を居[illegible]ふ行
なると云ふとも女房死角（とく）一つ念にいふしと[illegible]子
修を遂ヲ[illegible]人中山へ参りたれハ野も山も一面（めん）
に清[illegible]座の人集り念仏の声聞し左縁（さえん）に
根振て座（ようめ）露とならて毒（どく）しきものとなりて

郭巨か母の為よあれハ自然(しぜん)と天も感して黄金を

与へ給ひてあまたの書に書したる六角の郭巨か讃

ことに大略を書出して賞む又作者の郭巨を賞しと云て

賞むもの多しかつて賞すべし女房云ふて不孝と云

元来郭巨を賞する人云者多しといへども余ハ

何れも中山の先生の云はく程子の郭巨

か子を埋めんとせしは天命の郭巨か悪(とく)く道ふ

法も西方へ法も賞しと云郭巨を賞せり

行ハ不義なりと欲して弟子に郭巨を

る者あるに此先人の依心を好とし孔子

子も不義なりと時に行ハ不義なりと云事の非子

甲人は誤りて中山の先生(せんせい)の儒(じゅ)の詩を云え

録(ろく)して死しても極楽へ甲子是しと董(さす)り居(い)

人を哀れて其孝の徳の者を殺すまじと勝

と云孟子の言を選(えらび)び誰か進める一言よ

て孔子郭の所へしとて一度一

人死して二人死し後には左井ら袂りの先も
ありける孫吉也ことに此与四郎兵衛江戸へと
以て兄は親子四人西の方に向て合掌して
同月日に往生を遂ける日数立て形見と見
頃もなく親子四人ならび並て合掌の佛躰
ままも又腐しもせず其人々の成縁せるて縁に入りし家
云ふ然ん彼が然んと云て四人を別に中山に葬
りて永く懇ろに回向して四人の古墓今にあり

而も有如く覚成所以の銘にも七月廿日字
目出りしと云べきなり

寿保塚沢代亀之後文段

菅原流伝記巻之六

目かけ（めかけ）の始（はじまり）の事

伴山よふ東んの清絶目かけの始まりを尋る小松の

菅原のさ始まりの縁起（えんぎ）ハ清和天皇より清孫

貞純親王（さだずみしんのう）の御子六孫王経基（つねもと）王ハ鎮守府将軍（ちんじゅふのしやうぐん）

将親の嫡男（ちやくなん）多田（ただ）満仲ハ老年に及びて摂津

多田にて出家し大内の守護天下の政務を

八橋子検校なる淫聲（まうまう）之を改めて当世風に今人の人を移しける形（つた）を傳（つくす）んとて今様にて浮世を助んと是は利益の法乱なりと帝（てい）古を叛しまなれ忠孝節に背くハ聲も忠孝を挽一ハ音聲にも動かす能なしとても楚庭（きんてい）に籠（こも）く志るハ聲も未（そまつ）なる事なれハ浮絲と的鉄行て教躬を静（しづ）めさんハ理なると物学法し所（せ）を兆なく品なり止（とゞめ）り得てハ教え（ふ）の小子長女の内歌謡（きやうきやう）

の音を撰（えら）みて当世流行の調子の内男女（め）風（ふう）男女（なんにょ）風に作り成して中山なとの中の調子に千歳風師と云を師と教へて尤さ（つゞ）れなる男女風ハ是美（うつく）しき事女のぬき（ごと）美男（びなん）なりと男女風と名（な）づけ教ふ又歌を怜悧（れいり）便佞（べんねい）なる淫の姿（ふぶ）にして覚る傳く淫浄瑠璃の内にて狂（きやう）言を学文して淫まふ名僧高蔵つ［illegible］と是ん男女風に御挙まゝ下手本の筆の学文を婦人の儒文を覚（おぼ）へ

すなはち家を離るゝは只山に入て身を切て他力(たりき)にあらし
同なるものをすてゝ善しあしは古人の心掟(おきて)
剃(かうま)し衣をかけ師の言葉も我のこゝろと同じ
根本切断(だつらん)も出家尼も身を継(つぐ)満仲公の美男なれ
巌[illegible]擬(ぎやう)ふるまひ成りて[illegible]ハ[illegible]
三文字中に学力なく只明善(みやうぜん)平生(へいじやう)のこ[illegible]
ひとゝなる年十四才之時満仲ほのかに
比叡山ハ大に聴(いろ)ひ家(いえ)をも美女丸を連(つれ)まゐれと

修行を学まいらせよとハ破(やぶ)て美女丸事とせしハ
て法文の前にあはせまへハ出家説をとて仕ふ
経巻(きやうぐわん)読誦(どくじゆ)ハ[illegible]にもせんして年中の修行を打擲(ちやうちやく)
殺すの罪以の外なる悪(あく)とく悪く学知らり
父の帥の義へをおもしろく不届(とゞ)をなしと申まり
改(あらため)もあらゆ以ある小倍それハ是非なく中山へ
へ来り生た出家の美ハ法会(ゑ)し[illegible]只[illegible]
修行し世をなれハ沙法(さく)修すも[illegible]世の

人には常懐しきに都なりと盛(さかり)こそと嘲(あざけ)られんことも
口惜く文は清和の流れ満仲公の子として天下を
[illegible]頼光にかはらは[illegible]敵と[illegible]ひとは天晴(あつはれ)
おそ御きこしめさんは[illegible]まことの事に立[illegible]
すり討死致し申さぬ御[illegible]名を[illegible]んとこそ存
候しとの玉へは小ざかしき[illegible]の親御の命を
背き詞を尽す術もなきを[illegible]には[illegible]
不和して[illegible]とも思(いか)りゐては太刀をするりと抜(ぬき)

[illegible]し打掛給ひし一刀の下をかくもくゞりすると
庭にありし高欄(かうらい)を踏も飛越(とびこえ)追掛(おつかけ)給ふ満仲
公は未練(みれん)し縦(たと)ひ直(ちよく)義逆(ぎやく)にもあれ遁(のが)すまじと[illegible]
給ひておほせ付る仲光ならは[illegible]猶(ゆう)予すそ[illegible]
まさり[illegible]の[illegible]に入[illegible]美女丸[illegible]
[illegible]仲光の方へおほせまでくしても[illegible]
仲光大きに驚き[illegible]いかなる[illegible]の事の[illegible]給ひませ
ハ我がみの[illegible]されし[illegible]を嬉しひ幸寿丸(かうじゆまる)[illegible]

し給ふ父の御中の不興し　かくて満仲の御遺恨(いこん)
ありしかバ、承引(いんたい)の御中に上として叡山師の命
を背くに忍びん　唯ぞ討と振り仰げ給ひし法天
刀の下をくゞり是迄逃来りしかくまひし若子
と仰ける仲光承りまたみどりの御幼(いう)ハ我らが御前と
思ひハ候へ共ひとへに御帰りハ候とも一旦ハ御意の根(てうし)
なれバ此世の縁を絶(さた)ぎ給ひて都まで出し君にハ
来世の縁(さき)を結(さた)ばせ給ふ法師の御身にてもあるべし

若君学問を遂げられ名僧(あう)と成せられ来世の
縁をお頼み給ふが又ハ天下の大将軍(しやうぐん)と成り
学ハ法師の様に申さるべし　兎も角も若君の御機嫌(きげん)
を伺ひ見てくまでハ出して遊楽(ゆうらく)に御在所
されバくるしからぬとて　子を并び見せ候ふと申しかバ
法眼へ後世誰(たれ)をも法伽(とぎ)と頼みし法印御師へ
立へしとて二人の叔父仲光ハ才覚(さいしく)及び恵心の法印(めく)
何をも詮議(せんぎ)も及ばず　誰(たれ)が云(いふ)とありく仲光ら方二

是かくまかり成候ところの此耳に入[illegible]錦[illegible]

好[illegible]命惜しく[illegible]かくまかりなれ[illegible]の

又下（さげ）果[illegible]仲光は主人の子[illegible]のかれず

かくまいらせ[illegible]仲光を[illegible]

[illegible]郎等（ろうどう）[illegible]なりし中へ仲光[illegible]仲光

悴（せがれ）[illegible]海の方にかくまいらせて介抱（かいほう）する

[illegible]の子[illegible]かくまいらせ[illegible]

しも[illegible]御[illegible]の命を[illegible]

[illegible]の[illegible]の男[illegible]

[illegible]もの[illegible]天下の[illegible]

二千余歳の長き後の男[illegible]の悴[illegible]

[illegible]の[illegible]に見え[illegible]

[illegible]人の[illegible]も[illegible]

首討て[illegible]仲光[illegible]

り[illegible]侍[illegible]年[illegible]十

[illegible]又[illegible]

抜せ給ひし所に相恩(さうおん)の主を討まゐらせては勿躰なし

先とも云(いと)ひなから果(はて)しやゝありて仲光申けるは

御身も主人の孫(まご)也不便なれども此幸寿丸(うんどう)

まして僕(やつかれ)ハ主人のかうむれと心なくも其の

命をすてゝ討せしとて涙をたら(たら)しつゝ申されけり

仲光も此上ハ是非もなく太刀を抜き涙を

ながし若君の御殿へ入る也仲光ハ

太刀を以て云ひもせで我(うろむ)子の首を討

光に誅殺の役目を仰付られけれハ仲光入道と悔(くやみ)

の様子(ありさま)にて涙を流しける所仲光ハ動かされ淋しさ

左右に悔り若殿の御前にもて手を組観念(くわんねん)

銘々も云ひけれハ幸寿丸(かうじゆまる)ハ父の前に手

を合せ若君の御後生(ごしやう)を願ひまつり首尾(しび)い

かゝのまゝと思ひけれハ仲光の運命(うんめい)も極(かぎ)り

て今ハ是非なく若君の身代りにと父も涙に

の首打落しけれとて此上太刀をもつて仲光も一通り

怨念（おんねん）なりしか今まで家の忠臣惣体ハ路頭に立
泣と語られ若君ハアゝ云ふ根も無く一度深き恩をも
せん七年已の清教前ハ其の身の子の証とも清
人の子の詮も清之人伴者白鷺（はくろう）の罪遁（つみのが）れ
へ其はまあ所に酷（ぐつ）く柁をすること兜角アでも詮索（せんさく）あらんに
しかも方ハ若君の清縁にて弥まで清見ねまじ
今清縁（まびと）に語られ只なる種子を恐ひやづゝし
若君の清家ある人目をさえる種（こう）に御あて清縁（とも）

さよふよしハ壽安院ハ何とやらん清男残（こゝろ）りといふ
ゆゑにハめいうや（いうや）とアセシハいつまでもいまゝに〇若
君の種なる実（ぶつ）しまた生まれ月のまぎれ若君を清
落（おと）し参らせし清とやら伴者ア終に切腹（せつぷく）しれ
済（すむ）べしとよろしまで子ハ種に違なし若丈（ゆきまれ）よ
て清綿し其刃に若君の清庵の縁若（おほかう）達
若君清庵助け〇ハ只一（ちく）犬死（いぬじに）し神君を初め
鷺（さぎ）と烏（うれ）雲泥（うんでい）の違（ちがひ）なるゆゑ同年なれバ稚の首（くび）

思ひもよらず何卒網し清月翁ちらるに云ふあらバ私
ハ冥府の斗にもあらんと懐にも及バ神も亡き宗にて
云ふり成行御身の云通り一旦清風斗りし難く文
清月もそれ清命云ふなれハ弟ハ夭死に乃而清月
親ちりに己海仲をも聲き母様に頼みて斗りと
兄とハ家兄も長く清君にも一旦なりとも天晴乃
最期武士と云ふ武士に蒲團の上にて死するに
本意ならず非凡に陣場にて高名して死するを望

恐之来に悟りし清月勤むでうゝろし此云蛛
年月家身のうちハ新に孫鑿居梓書写丸
天晴の武士と呼バるる程にて神仏を祈りし其
今ハ母の身に織んとて十四歳の冬齋にて母に
今ハ恨ありあれバ母にも暇乞して共にわかれの旅
詠ふりへしと思ふハ母に言ふ清暇乞の銭れ
旬じ見顔をも眉をハ共にわかれと見へハ稚しの黄
泉の際の成丘で清風に無ふ旬じ見て硯也

當座一首の和哥を書付ける

紅師に終に向く旅立露の身

身を晒ひの命しらずと

差添を前に隠て是を母への形見として

重ねるへし極て松ハ果報なる我の隠し事に我

り討ちて大切の主君の為にも御為にハ母に

先立は親に子の親子の忠義ならるへし命

に代ハ孫すや手本にすべしと首を渡せる

まかるべしと平家方の侍子か天晴

の武士と感ぬさぬと皆人切るか侍え

も浅ハ悲嘆の涙に暮る方

にかりと覚し仕親さニ死ぬ我かはハ候

ぬ御の清左衛門時刻限れハ早と云ふ実に

道なりし西園寺と云ふ者も切て振上

に首を打落し文信殿へ持参して

清前へ出されハ清御感無振れ給ふに侍え

ハ道にて武者に押取られ若君の御首討れ候と披露
大勢を以て首討れハ我も後を隔て永く世を捨
まらして菩提を云ハ満仲云ても御後悔仲光
出けるを仲光東西れんなく最期もせんと申けれ
と仰せける中に潔く御最期まいらせんとて是
それハうたがひなし玉ひける仲光宿へ帰り此首を
一族の者に見せ忍び隠し御僧の御首と申
是にて後の為にも御供申せよと云捨て

美女の御所へ入玉ふ無慙なる人々掛り満仲云
若しき御んぼ幸寿の首を見ておとしも敵に成
御前ちからしく思ひしほ斗りて家名
猟ふ御縁を乱しまふて隠の大将軍ニ幸寿
さて何の身の果ぞ我ハ命をと覚悟きめ
思ち首をよこし逃しと告て寝ひ隠れける
仲光ハ出て住所ニ幸寿の首を大死にさ
せたりしと泣ひ幸寿に海り美女殿の事ハお名れハ

仲光も今ハ幸寿丸が事ハ満仲へ申し伝へ
来りしと思ひ給ひしに将来の死ハ覚悟ながら御
逃(のがれ)がたかりしとて御首を切られバ若君天下に
難儀にあひ其後行方も知れず惑(わく)ひ只御不便(ふびん)の
身をも何となれバ御父満仲公ハ御怒(いかり)強(つよ)く若君を
住まゐく是れ若君を御介抱し頼(たの)みに聞(きこ)す
是れらの事ゆゑ御向(しう)ひの主君の御首を討奉りし
と死(の)の御縁を立首ハ七十余の御勘当(かんどう)
有りと御存しれ討とても御身のし討首御
主之何とて御首を討奉る主を殺しまでも
手紙(そのけ)に来り切腹(ちゆうしせつぷく)なす極めて将来(げ)に
御身殺すに忍びんと是非御請ハそれを来りさせに
成候仲光之儀(ぎ)り素の御首を隠(かく)しと云(いう)御縁(えん)
入道将の御の志を御縁ある出家の御
若君を御預け申され幸寿丸を身代(みど)わり将の身死を
られバ幸寿丸にとても婦なしとやうに

れハ勇猛ハ極めて不便なる故ゝる苦の根
ぞ存じしるゆゑハ何とぞ母が首を討ハ
せじ情なくも老母を討ぞやとしれもして
歌を出しハ永劫の親子の生年ハ元の未来謡
りまれバ〆の伴を肖より越しての〆にハ
お家来母なと気ひかへり老母ゝ苦提の為
出家と成でハ叶ふまじ極ゝ僧が是非も
な質ゝあると書置して比叡山の横川楞厳院

の恵心僧都の法弟子と成せられ後を深禅僧
と申せしハ法ハ御海仲公の法名にて遠く
深禅僧正ハ天下大の法華叡山第一の学者と成
玉ふ。此後海仲公ハ法鏡として法ゝゆるまし郡よ
横川の恵心僧都を法衣にさゝれハ恵心僧都
此深禅僧正を弟子の内に速り玉ふ海仲公の
せられしハ僧都ハ雨ゝまて法隠まで離系
老母の身まで是程に臨終の時ハ様

まて経に説法者は清浄ならましと仰ありき

れハいつまても清浄ならむ事こそ候へ是ひとへに(ぐわうぐわう)實(みやう)光

末(すゑ)の世まても蘭(ゑ)もぬけ(みめど)給ふ事あるへし一生の年

積りておもふ事にしてそも我(わが)心(ぐわ)に愛(ざいはう)財の国

に在る事をこゝろへしたるを捨てん事を思ふことなき(まの)

法の名代に(じんぜう)深信をすゝむへしと深く法を心得て

何ぞかく思ひ貧ぼる所一度たのまれぬへきと師の御心も

妙法の心のまゝに(あが)仰ぎ出家に深く御心を(まど)惑ひ給ふ

塵ほどもなき(けがれ)業障(あくごふ)無明の中にて(じんごん)浄土往生は(あく)悪也

だにも通りて高野山に参りても悟ること(ようしやう)もなかりし

末の世に至る(のべ)迄海(かうかう)や今の(ゑんがく)(だいひき)ひらき

たる類もそれら(わう)も信ずる事に天然の菩提

と云ひ帝王も及び臣の法をすゝめて(ぎやう)所(るゐ)を信ずれハ

子の如く(まう)親の類ハ(まこと)信心にしてこれをあらはさしと仰合ふ也

人信類ハ信の如く(どど)類の身はそれに(まこと)信心の中

へしと云ハあらじやとおもハれハ(がう)いかにぞ信心申さん

また色と作る種ハ父子卿と申つし此檀縁（だんゑん）
ともハ生法方便法界男女ともそれで忌法
此の如くして相の字を成ぜしれハ法動（えんどう）
法顔（ゆう）しあるらし法功徳（くどく）そ此へんと法経（ほんさう）あ
極ハ男女ともそれにまつ（あさつめ）と
あいハ人よりもちて長寿の身ハ極の如し
なすずとハ仏（びん）ハ生害（がい）をすゝめし（ねや）の
源（あさき）ハ新たなるし師の法華（うげ）とハ出ぬる

くると作れバ法華経道所（ざいどころ）ハ地（まる）じあるをせめし阿鼻（あにび）
女人の成仏せよとまりしときもしと法悟び
の源をさへ此れ代法華経にハ七年ら前男女の
法有詩と申のよくなるより此者観らるび法国
も浅（あさき）つぶしありしてらハ極ゆるめしもあらぬと
男女とも申しまいハ及ぶ所らし嫉むと法華
の法華をられ頭（つむり）よりさ脊（やまう）を担（あて）ひても成人致
され候へまで法華（たがひ）にて法悟ハ限りなし真心

仏教ハ権門ニ行ハれ浄土教ハ群類（ぐんるい）を専用
の法鐘ヲ法道家の地ニ母法ト向ひしハ本文
経念ニ背き母すハ法親を欺き法恩も迂損（うえん）
じきもし飛以の世ニハ通（のう）るつぎは法中学
ハ師の坊の法衣しても人て恵心僧を苦殺法ハ
法国民へ大きにも法律寺法中学を兼ね東本（こうしい）
を教ハ生の御親鸞（しやうさうさう）しも誤し上もハ何に頼むる
意外ニ意ゟ不知其色を招きりも反形（う）の身を導き

のみならず世界にしるゝ所の不思議（ふしぎ）とも振ハ鉢（あの）
めなりしは未曾有の奇瑞を護（まもり）りてぞ毎日毎夜
法様寺（じねん）より明かに自然夜の夜に事にもよらず是（こゝ）
明の光（のう）り法國の内まで照（ひと）し御向（ごかうさき）ハ法
國開（ひら）き法華経典（えんざう）行きて又不思議
また法師に隣（つぎ）て法権に往生を遂げられし
なれバこそ是より國明（あけ）の始めと申
すべし 浄瑠寿

野をも畠をもすぎて中山花

起之まじりたるに道の世のことゝなん

右は思ふ事の曲にてゐの説歌にて別なる用事なし

傳ふ行われのある事ながら道の世に落句のなき

まじりては俳ふ正ぬかと理窟なる式に当和ぬ

為の云くもくは句の詞にて題を意顕して詠

故は中山は讀むと物し中山なる人に也契り

かけて讀ことなし中山なるを讀は中山なるを意て

月をこゝろに月見ましと讀爺をも讀に契り

句に恋しといひも頼ひて極見しらるへし

芳院花後筆ある紙

曽我殿落日記巻之七

二宮の姉播磨の新清水観世音

千手観音の長さ八寸

開山清道上人

元亨釈書に大寺といふ人王子六代の皇孫天皇の後代に朝敵入鹿大臣を大織冠鎌足公に追討せられし頃後胤にて弓馬に達し

たゞ君は我に鏡(みが)ゝ敵を亡(ほろぼ)しゝその情中也
彼由分名ある武士なりしに樵子の出有
壱人当千と呼れし枚夫(まいふ)と云(いふ)武士都也(みかた)で
清興由三年の戦(たゝか)ひまで従に人廉で退城
ある者妻子を恩愛(おんあい)を去(さり)て枚夫も樵戸
に隠れ住る所に稚(あどけ)なき枚夫三年の其の内に女房
己も小侍(さむらひ)と交通(こうつう)し懐胎(くわいたい)して既(すで)に七月
なれハ夫帰(かへり)りてハ乃知られてハ安人なく
命にまかせみだりに隠(かく)しおかんとても難し
遂に其の術めぐらし邪道(じやだう)なる女なるが夫枚夫をたば
し殺すべしと二人相談(さうだん)をなし縦令(たとひ)枚夫いか
程の力ありともたゞ女すふ手になし安きことゝ謀(はかりごと)
をなし狙(ねら)ひしを知らず枚夫に生まれ
男の子となれバ女房の懐妊(くわいにん)に子生き(き)てある
もハすさ(すさ)まじく小侍桜丸に向ひ留守(るす)を
の中に兼て好(すき)のことゝ存じ山にかけ入らず(ぬ)

せあつかし探獻ありしくるしみ尤も所々重てる都
の職ハよ清晉れも以んよ清筆能しり清書
ら如まじき処とらふ探幽好の龍あれハ能もんし
げけ重ちる驚に及へし電光もよし中付ちるに
いなき大然人を引連竄し金銀を持ていハ都の
軍勢狼百姓民の衆の云ふ威儀作山す
ちふ又月なるの猫ハ之と形へ雪ても清爲めにす
あれハ鼠の如ふ年々清浄て年ありへしと云

八相そ方ハ宮三の内残の所智恵けう
沖の目通りて御ハ海老人事へしとて弓矢
を以て狩野探幽ハ神なる如実の書もふ許る
巧なる夢まで如ん山ハ法師しらうと女房ふ
同じく申して許其して弓矢を持ちて取りける枝
まハ君ハ小猫を招も取黒龍とて其事あり
犬と又白猿とて其ハ見なる犬と二足小さき時
飼置いろとても猫まつれけて撲し出さん

矢にて獣（けもの）を射（い）るへき為に此鉄炮（てつぱう）ハ未（いまだ）
わたらさりし時矢手より鉄炮ハ足利の時代南蛮（なんばん）
国ゟ渡りて日本にて鉄炮を打事修練（しゆれん）せしハ薩摩
国の住人何某胆練（たんれん）ありて夫ゟ鉄炮
弘まりて大隅弾正（だんじやう）抔申も右の鉄炮をねらひける
しと程迄ハ奥深（おくふか）く分入て獣をうつ事ふ
又是ハいかにと云（い）ハ唐土にても見識
山中に於て獣をひと云（い）てつね（ゆき）に皆ハ此用にて

業なる網（あご）に及ひしれていふてと深きと奥山に
分入人猟漁する殺畜（せきちく）する常に弓矢を
たづさへ引志からハ何をも見付て打放を云に
や何れも及ぶ所に行くは此山にて生命を殺（ころ）
さん為連（こめつれ）迄だまして殺す所為是
法罪なるゆへ当にして殺すと云是ハ以て
天魔（てんま）波旬（はじゆん）悪魔（あくま）外道（げどう）の類にて向ひける
それゆへし嫌魔（まや）申す事ならぬ獄へ堕ちて苦

弟子と呼れ肩を並る者なし然るに運命

こゝに尽果くらうつ物の道しるへのちから手にしかれ

我氏のうまれに及へ前弟子に射殺すへし御如

何故恨をうけるのみならすと云ふに前生の形の中

呼すへし何の遺恨もなし其年のはすの中

男なりと発曲し懐胎の月に至る武士の射られて

八二人も流浪有し故に我手にかゝり射殺

すへしと云職ありなる恩あるに報ふへしに

論すし今ハ尋常に死すへしとて是非自害

二つの矢に向ひ二足三足小さき時分御前に

ぬれたる今僕の後に隠れて死すへし先飯

八生と有ける合せの用意に跡もしらすあらす

よみかへの首振ふさ高き処よも能やうへし尓

八名の心中へし武士山中まて打れ死しても恥

をさらしけり口惜されは死骸を捨すまて

人小身く世の形よ存其形よ打もくそまと二足の犬

ことくに餌も喰はず耳も尾も垂て畏る体
あれハ大に怪しみ出けるか嫉しや家中も
まで云ひのゝしりさらに猿の手に射んとて弓取
をひろげ的に成て背中へひしめく猪に侍に矢向し
も心ありげに弓に矢をはげたるを家臣を見ん
へしかるに二疋の狐は互に飛をかゝる心を見て猿に
飛付ては弦を喰切り自身は猿楽の咽喉を喰
付しかば二疋の犬猛り狂ひ散々に喰殺す猿楽は
大に感じ扨こそ畜生なれども人にも増り
たりし飾の甲斐あり流をつゝ遣ひ身にかゝりしと
射殺さるへし出けりしと猿楽すなはち頭
つかしとありけり二疋の狐ハ云ふ与へつけに尾をふ
り猿楽の志ふかきにたえて恩れハ猿楽が女
房ハ猿楽の居たりを取り帰りとも女房に乞
と言ひてそ居りしを又二疋の犬何く飛かゝ
かり喰殺し其後猿楽を嫌ひ二疋の狐を手厚に養ひし

然るに御きげん物を申され太子これを天
稚ん人ハ人目を耻らひ女房ハ子を云ふなれバ合ひ
云ふの大きを子の如く思ひしとも未だ納めの
御心も牽牛の思ひ云ふ猶大ひ思ひのまゝに慰め
給ひ曲を尽して二つの夫を思ひやる云ふと是又今宵ハ生
二星是より牽牛ハ力を落し歎き暮しける
二星の中の蓬懸隔にて是ぞ嵩ならん心を通はん
くりかへし中にも御恩を祈りつまを逢はん一夜

の夫と契りし織女牽牛の蓬萊を帯ひろげ夫
ちかひ云ふ約束せし丹波山の岩に蓑笠をあて
清水の舞台の清水ととふ年々泉の清水
と湧き出る新清水と云へ極楽の鬼を祈り
云ふの寺に梅多く花盛りに今の御友に
上様河原太夫と云ふ庵の名とし梅代稲荷
所は山寺にて月も云ふに程の東山に知られ
夜雪さ夜の如くなれバ春の花を桃として落ち

眠りて居たるつまに飼たる犬ワンくと吠かゝる程に主
耳に今々まで犬ハ猟師にたゞ掛り吠ければ
呀驚き掛りしとすれ共己らんとせず猶
身に忘れたるかと以の外腹を立腹して刀を抜
延だ振上あげ山刀にて飛来る犬の首を
切ぞ犬の首ハ空へ飛ぞと見へしが二三丈つと血
流れ掛りこハいかにと見上ぐれば其上に
蟒樹の本の二丈余り有る蛇の犬ハ元

をろんで空を起しける所に犬の首ハ
して首を切に切られても与へる蟒の咽に飛
付て蟒を助けしと是に依て犬を霊と号
神に祝ひしため犬神大明神と云ひ又今庭ちに
猿猴と云ふ犬を飼て連來りしに猿猴酒
生鮮なる或時め山に来て居たりしに山の中の
月夜と云う物の怪の出しと猪大なる犬猿
命を断ばいかにも起ける犬道

め川へ入り獄(ごく)を和して濡(ぬら)し罪人の躰を揉て居る

邊(ほとり)の岩石を苦めし又湯(ゆ)[illegible]勝[illegible]を志

めし[illegible]つ[illegible]刃摑(つか)れ裂(さ)きて[illegible]死しける

罪人の肉を咬(さめ)て尺[illegible]大[illegible]郎して[illegible]ぎ

[illegible]け之御(なう)[illegible]焼(やけ)て[illegible]罪人躰(ぶく)を[illegible]

[illegible]大[illegible]郎して罪[illegible]あらんと大蔵(ぞう)

[illegible]罪人の[illegible]道[illegible]人[illegible]

[illegible]溪(さ)綵(か)[illegible](ごく)の[illegible]罪[illegible]仙

銅(めうけ)花と云草花(くさばな)[illegible]時[illegible]人佇(たゞ)ず[illegible]

[illegible]道[illegible]人[illegible]拵(あつらけ)[illegible]の銅(かね)

[illegible]罪[illegible]

[illegible]鉢[illegible]

[illegible]の[illegible]土[illegible]銅[illegible]長[illegible]

[illegible]の[illegible]不動(ふどう)毘沙門(びしやもん)

[illegible]基(ぎ)の[illegible]仏[illegible]

[illegible]衆[illegible]冠(こうい)[illegible]の[illegible]銅[illegible]の[illegible]

[illegible](かげ)[illegible]銅[illegible]の[illegible]

しるゆゑとて京の清水を[illegible]て口の[illegible]奥

の院と[illegible]に似たる[illegible]にて[illegible]

あるもの[illegible]にも出[illegible]人もあれ

斎非時に[illegible]を下り銀[illegible]

人も大事にて[illegible]

集り[illegible]の[illegible]

[illegible]

味噌[illegible]

下り新[illegible]菓子[illegible]

[illegible]に何もそも菜[illegible]云山椒の種

あるとき云[illegible]

喰[illegible]七人[illegible]山椒[illegible]白

して苦しみ[illegible]呑でも[illegible]

くと[illegible]気[illegible]君

[illegible]

[illegible]

人見あやしく七人なから御ぬれたる裾はやぶれを絞
まはり寺僧を待居たるに立出其図も見へ來ね
ワタくしか伊をかうるへしなるかをぞと年寄りの尻へまめ
状ころ山てはなされきいると出して見てきいぬと人を遣
しけれはいつ口はたて居たる所まて寐て居たる所門
をゆて門へ入けれは古僧縛られて居たるをあと
肝を潰し見れは何事ぞ其七人御ぬれ居たるいか
成ぞと見返ゆるれは郭の婦ぞと根を外にし

詮れは生をしてて縄を解扨其人下り様を尋
なれは若き者か棒を以て咽の業をやりて
見れは中に相きくも見不たはまく背にくり
て其へ下り先へ仕抱て郷之人の縄付られ扨
き郷んとて腕をまはして持居たるに七人のちから
かりに悪しき鋭き縫み所に詰て頻に
係く成るもの二三人に山の鉾に咽るもの有
つるに七人なから動けぬ程に喉に鋭き声の

は報（むくひ）何卒我らが命を助け給へと云し今述し
けれハ盗（ぬすみ）に来りし賊に許し給ふ清（しやう）命
れを恐れと佛（ぶつ）の慈悲を知るハ遠（とを）ざかずハ
助け盗みも慈悲（じい）と命を助け給ふ七人の
者ども是を感じ礼拝（らいはい）し近侍（にけ）して先生
く念仏連（れん）自在（じざい）大衆（たいしゆ）の御者の妙（めう）力（りき）し本（もと）より
比丘に枝（おい）夫悪（あく）衆の業を大いに述て正
浄しるも是又思屋（おんどく）為に（こめ）稀り年月知の給ふ

なれハ如是清利益の有がたきの也
くれ〳〵も有がたし

御詠歌

哀（あはれ）みも大悲ましまさバかならず照（てら）じと
南無と思ふのこゝろは清（きよ）き川（づ）

こゝに伊予国（いよのくに）和気（わけ）郡に奉公（ほうこう）し長者善兵衛（ぜんべゑ）
ありける日頃念仏を信仰し毎日十句念佛
修を或年にて唱（とな）へ年々大師に逢ひ

弟ハまだ若年の事なれバ兄弟の中の子ゟことに
心(こゝろ)ばかり主人の奥方(おくがた)を敬(うやま)ひ三度々を勤れ
夙夜主人夫婦(ふうふ)を伺(うかゞ)ひ二人ともに孝(かう)にすゝむと
つかへしに此間に主人の母相果し母に
[illegible]此度母に離れ[illegible]つくし寒暑(あつさむさ)
[illegible]日夜大切に介抱し母も喜び母を[illegible]
[illegible]此度斗[illegible]の[illegible]しくに
背(そむ)き二人[illegible]にすゝむと云てもあらで[illegible]此(この)

二人ハ兄弟の弟の方是にて[illegible]
しても助けまし夜も抱きまた[illegible]
ありし事にて[illegible]二人主人の[illegible]
め[illegible]も[illegible]嫁(よめ)ハ[illegible]
是(これ)ハ大切に[illegible]勤方能(よき)女なり
[illegible]二人の命助けまゐれ
[illegible]とも[illegible]
目(め)が[illegible]しと[illegible]

入行けるが据風呂の中へ這入て先夜は之
体をよくも掛先夜補の中にて見しかハ夜の
後ハ只今の所にて頑斎老人の顔を
かすめ見るに先に相違なけれバかねて
家内の者を集め待かけしてハ無年成仏す
る様とて只明日死ぬ身の上なれハ乞食
一夜りも然れども其身銀を借り十匁銀
通夜を只通夜の如くに喝と見ゆ[illegible]

所合妙なる其の事の相撲此風呂の名残
に合せし家ハ今も有る事ずる銀を取て事に
何事も有し所を貸して妻子とも皆の住なれバ
で聞けば其時とも風呂の相名の掛主ハ
掛るる銀もとき其所の家住と廣く
蔵されハ其下にも掛と掛合ひて其外ハ何人
も此人を掛して又銀子を礼として
あり合の者も見せ見ても月々は住る来り[illegible]

是によりて淫乱なる書を人々遠ざけてまじへざる事也

あるは俗して両親の礼をもて一生の

楽は浪費を好むに託けられ老母へ親にて和

子の夫の用を務め悪道に陥る女の身は

是皆夫のために立まゐり明けぬ先に寝

へ親をして家老に勧め家の有るに何事はなくも

ともに中の孝道害あるは忍て巻首に折

されは淫遊し殊にてたゞ勤をも立して

八人のうちも怠られず朝の夜朝ひとく

されは老母に助けは生の親の名は又家

すまして少し女老母の顔を見て老母に

何事しても助けなき婦女経手に孝なし

舅の姑を見て長夫の嫁の姿を見てこそ

夫の子の家も助けの伏従し夙に起て

枕に主人の別れを離れし夙夜の中に

是其の家に如何とも出て何事もなく

傳兵の老母に向ひ女房を去[illegible]と云へハ

老母ハ[illegible]に向ひの[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]母親ハ[illegible]母親の[illegible]

も是も親に孝行にて[illegible]

何卒女房の[illegible]を[illegible]と云

[illegible]紙[illegible]入[illegible]

[illegible]

[illegible]下に[illegible]

[illegible]一命を助け[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]と云[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]なく[illegible]ける[illegible]老母
[illegible]饒(いらく)[illegible]主人も感心して
妻女も老母に[illegible]常に[illegible]聊ける[illegible]是偏に観音
の御利生又[illegible]二人[illegible]通ひし[illegible]
[illegible]文殊院[illegible]毎日十句観音経(ぎやう)[illegible]年(ねん)通して
唱へし[illegible]聊かも[illegible]
[illegible]

そのへわれ大黒
てんはいつまでも
かねもちまんまん
福をはこぶなる

殖運

奈良市東向通中町四番地
吉田安治郎
電話四百三十九番
振替大阪一二一五九番